

# 蜜蜂のあとを追って

## ——モンテーニュとエラスムス——

山 本 佳 生

A consideration upon the typical image of a bee: Comparing Montaigne with Erasmus

Yoshio YAMAMOTO

### Abstract

This article examines the relationship between Montaigne and Erasmus. It is widely recognized that Erasmus and his works had a great presence in the intellectual culture of the sixteenth century, and his philosophical or theological thought impacted many humanists in his age. Montaigne was one of the writers most influenced by Erasmus. He is known to have owned and read intensively the works of Erasmus. Despite his favor and Erasmus' fame, Montaigne has mentioned the name of Erasmus only once in his *Essais*. In order to make clear his intention, we compare their thoughts, by exploring the image or metaphor of a bee in the European literature from Antiquity to Renaissance.

The image of a bee, flying among flowers and gathering honey, often appears in the literary text. Some examples show that this image corresponds with that of a poet trying to invent his verse from various sources. Although Seneca also used this metaphor in his letter to Lucilius, he added a pedagogical meaning or interpretation. When we read books, Seneca said, we should gather knowledges or thoughts, classify them and blend in our talent, as do the bees. He highlighted the importance of the digestion of thoughts. This meaning was widely and traditionally shared by, not only writers and poets, but church fathers. Erasmus succeeded to it and made this pedagogic meaning more decisive through his works.

Naturally, Montaigne accepted Erasmus' meaning and the importance of the digestion of knowledges. Yet, he was not a scholar but a nobleman wearing a sword and he put more importance on the capacity of judgement than the erudition. Thus Montaigne avoided referring to Erasmus' name, which evokes his great erudition. It is appropriate to Montaigne that the preference for realistic judgement and its exercise constitute his originality, his *Essais*.

### はじめに

本稿の目的は、ミシェル・ド・モンテーニュとエラスムスの関係性について考察することである。はじめにモンテーニュがエラスムスについて言及している箇所について確認しておきたい。それは『エッセー』第三巻第2章「後悔について」においてである。モンテーニュは、「もしエラスムスに会わされていたら、彼が召使や宿の主人に言うすべてを、格言 adages や警句 apophthegmes と受け取らずにはいられなかっただろう」<sup>(1)</sup>と言って、エラスムスの名声の大きさを示しつつ、それを茶化してもいる。モンテーニュがエラスムスの名前を出すのは、『エッセー』のなかでこの箇所だけである。エラスムスのルネサンス期における思想的影響がどれほどのものであったか、あらためて論じるまでもないが、モンテーニュがたったの一回しか言及していないというのは不自然に見える。その理由を探るために、モンテーニュがエラスムスに帰している、常に「格言や警句」を

吐いている人物というイメージに注目したい。

モンテーニュの書齋には、エラスムスの『格言集』 *Adagiorum chiliades* や『警句集』 *Apophthegmata* のほかに、『痴愚神礼賛』 *Moriae Encomium* や新約聖書釈義に関連する著作の所蔵も確認されている<sup>(2)</sup>。また、モンテーニュの学んだギユイエンヌ学院では『ラテン語語用論』 *De copia dupulici verborum ac rerum* が教科書として使用されていたことも知られている<sup>(3)</sup>。ここから推察できるのは、モンテーニュに対するエラスムスの影響は決して弱いものではなく、セネカやプルタルコスを愛好する者としてむしろ親近感を覚えたであろうことだ。また、すでに指摘されているように、モンテーニュの受けた教育は、エラスムスの教育思想を大いに反映したものであった<sup>(4)</sup>。にもかかわらず、エラスムスの名前への言及が一度だけであり、それも常に格言を吐いているというように少し戯画化された姿で描かれているのは、どのような理由があるのだろうか。

1559年のトリエント公会議においてエラスムスの著作類は禁書目録に登録された。モンテーニュはエラスムスの名前によってローマ・カトリック教会の気分を害するのを恐れたのだろうか。しかし、モンテーニュは改革派の人々に対する感嘆を『エッセー』のなかで隠すことはなく、また、かつて『エッセー』が教会の検閲を受けた際も、ほとんど譲歩することなく自分の姿勢を貫きとおしていることはよく知られている。ゆえに、エラスムスに敬意を示したければ、モンテーニュは遠慮せずにそうしたであろう<sup>(5)</sup>。

ほかに理由として考えられるのは、『エッセー』における多くの引用と同様に、出典を隠すという規則を適用したのではないかということだ。しかし、この言及箇所では、『格言集』の著者であるエラスムスというのが明白にわかるように書かれているので、この規則からは外れている。

また、エラスムスという有名な作家を引き合いに出し、それがともなう「知識人」、「作家」というイメージを反例として利用することで、みずからのスタイル、『エッセー』の構成や著作のジャンルにおける自由奔放さを擁護しようとしているのかとも考えられる。しかし文脈を考慮すれば、ここでは、輝かしい外見の人は内面も同様に輝かしいと世間一般で考えられていることに対して、皮肉と非難を投げかけているので、モンテーニュがみずからの著述スタイルを正当化するためにエラスムスを登場させているわけではないことがわかる。

もっとも妥当性のある理由は、Magnien が指摘しているように<sup>(6)</sup>、モンテーニュが1573年から王室警護団武士であったこと、それに加え、『エッセー』第一巻25章「術学について」、26章「子供の教育について」の著者であることである。作家や詩人、学者とは異なり、戦時には馬に乗り、剣を携えなくてはならない貴族であるモンテーニュにとって学問や書物にどっぷり浸かっているようなイメージは避けなくてはならなかった。さらに、博識よりも判断力を重んじる趣旨の独自の教育論を展開した事実から、博学多才の典型としてのエラスムスを何の留保もなしに登場させるわけにはいかなかったのである。

## 1. 本論文の課題

いま見たように、モンテーニュがエラスムス<sup>(7)</sup>について一度しか言及していないのには、職業上の理由、時代の趨勢と関連した理由があるということがわかった。このような理由は、モンテーニュはどの程度エラスムスの影響を受けており、どういう点が共通していて、他方でどういう差異があるのか明確にするのを妨げはし

(1) *Les Essais*, édition conforme au texte de l'Exemplaire de Bordeaux, éd. P. Villey et V.-L. Saulnier, Paris, PUF, « Quadrige », 2004 (1<sup>re</sup> éd. 1924), p. 810. これ以後は巻数をローマ数字、章数をアラビア数字、ページ数、そしてテキストの階層区分 (a = 1580年の版のテキスト、b = 1588年版、c = ボルドー本への加筆) というように示す。例えばこの箇所は III, 2, 810c となる。また、本論文でなされる欧語文献からの引用はすべて、既訳のあるものはそれを参照しつつ、引用者が訳を付した。

(2) « Catalogue des livres de Montaigne », *ibid.*, p. LVIII.

(3) Izora SCOTT, *Controversies over the imitation of Cicero*, New York, Teachers College, 1910, pp. 120-124.

(4) Roger TRINQUET, *La jeunesse de Montaigne. Ses origines familiales, son enfance et ses études*, Paris, Nizet, 1972, ch. VIII-X, pp. 193-383.

(5) Cf. *Essais* (1582), texte présenté par Philippe Desan, Paris, Société des Textes Français modernes, 2005, « Introduction », pp. XXXI-XXXIV; P. DESAN, *Montaigne. Une biographie politique*, Odile Jacob, 2004, pp. 403-407.

(6) Michel MAGNIEN, « Montaigne et Erasme : bilan et perspectives » in *Montaigne and the Low countries (1580-1700)*, éd. P. J. Smith, Brill, 2014, pp. 40-42.

ない。たとえば、『格言集』は『エッセー』のプロトタイプ、つまり原型として考えられることもあり、また、『格言集』からの暗黙の引用も『エッセー』の中に確認される。さらに『キケロ主義者』*Ciceronianus*で扱われるキケロ模倣の問題の反映が『エッセー』にも見られ、モンテーニュの言語観、文体についての考えなどもエラスムスに多くを負っている。しかし他方で、神にかんする問題、信仰や宗教については、エラスムスとモンテーニュのあいだに微妙な差異がある<sup>(8)</sup>。これらの問題について従来の研究は、エラスムスの著作と『エッセー』を個別的に比較し、類似と差異について検討することで、両者の関係性を明確にしてきた。

『格言集』については、20以上の引用と借用が確認され、有名な「アルキビアデスのシレノス」や「戦争は体験しないものには快い」などが活用され、そのうえモンテーニュ自身の考えもそうした格言に付け加えられていることが明らかにされた。また、『格言集』はテーマ別に格言が並べられているが、これは『エッセー』の構成に影響を与えているのではないかと考えられており、『格言集』を『エッセー』のプロトタイプとして見ることを可能にしている<sup>(9)</sup>。他方で、問題点として挙げられるのは、『格言集』は古代の格言の集積であるという性格ゆえに、モンテーニュが『格言集』から引用したのか、それとも古代の原典から直接引いたのか判別するのが難しいということである。また、この逆のこと、つまり原典から引用したと考えられていたものが、実は『格言集』から引かれているのではないかということも、問題点として挙げられている<sup>(10)</sup>。いずれにせよ、こうした研究によって、『エッセー』を研究するうえで『格言集』の存在を無視することはできないということが明白になった。

次いで、『キケロ主義者』とモンテーニュの関係については、主に文体論にかんする問題が考察されている<sup>(11)</sup>。モンテーニュが『エッセー』第一巻26章のなかで主張する「好みの話し方」は、「単純素朴で、紙のうえでも口頭でも同じように、豊かで力強く、簡潔で、引き締まっているもの。(中略)冗長よりはむしろごつごつしており、気取りからは程遠く、型にとらわれない、切れ切れで、大胆な話し方。(中略)教師や修道士、弁護士のようなのではなくむしろ軍人らしいもの」<sup>(12)</sup>だが、これは、エラスムスがキケロ主義論争の最中の1527年にギリシャ語学者のFrancis Vergala宛てに出した手紙のなかで挙げられている理想の文体と、非常に類似している<sup>(13)</sup>。この手紙は『キケロ主義者』の献呈文として付録されているものでもあり、このことからモンテーニュがエラスムスの『キケロ主義者』を所蔵しており、影響を受けていることが確認されている<sup>(14)</sup>。

以上のような研究成果をふまえて、本稿においては、より広い視点からのアプローチを試みたい。つまり、『格言集』や『キケロ主義者』といった個別の著作の枠組みをこえて、エラスムスに通底する思想ないし概念を手がかりに、モンテーニュとの関係性を探ることである。というのも、エラスムスの各著作はそれぞれが重

(7) エラスムスの著作や書簡については以下の略号を用いる。

ASD : *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, Amsterdam, 1969-.

CWE : *Collected Works of Erasmus*, Toronto, 1974-.

Allen : *Opus Epistolarum Des. Erasmi Roterodami*, ed., P. S. Allen, H. M. Allen and H. W. Garrod, Oxford, 1906-1956.

(8) J.-Cl. MARGOLIN, « D'Érasme à Montaigne : l'écriture de l'opinion et la double voie de la croyance » in *L'écriture du scepticisme chez Montaigne*, éd. Marie-Luce Demonet et Alain Legros, Genève, Droz, 2004, pp. 109-129.

(9) Margaret MANN PHILIPS, « Erasme et Montaigne. I – *Adages et Essais* » in *Colloquia Erasmi Turonensia*, vol. 1, éd. J.-Cl. Margolin, Paris, J. Vrin, 1972, pp. 484-489; « Comment s'est-on servi des *Adages*? » in *Actes du colloque international Erasme*, éd. Jacques Chomarat, André Godin et J.-Cl. Margolin, Genève, Droz, 1990, pp. 331-332.

(10) MAGNIEN, art. cit., pp. 30-31.

(11) MANN PHILIPS, « From the *Ciceronianus* to Montaigne » in *Classical Influences on European Culture*, t. II, ed. R. R. Bolgar, Cambridge U. P., 1976, pp. 191-197; MAGNIEN, « Un écho de la querelle cicéronienne à la fin du XVI<sup>e</sup> siècle : éloquence et imitation dans les *Essais* », in *Rhétorique de Montaigne*, éd. Frank Lestringant, Paris, Champion, 1985, pp. 85-99.

(12) *Les Essais*, I, 26, 171-172a, « Le parler que j'aime, c'est un parler simple et naïf, tel sur le papier qu'à la bouche; un parler succulent et nerveux, court et serré, (...) plustost difficile qu'ennuieux, esloigné d'affectation, desreglé, descousu et hardy, (...) non pedantesque, non fratesque, non pleideresque, mais plustost soldtesque (...) ».

(13) Allen, VII, n° 1885, p. 194, « (...) malim aliquod dicendi genus solidius, astrictius, nervosius, minus comptum magisque masculum ». 前註のモンテーニュの文と比較すれば、court et serréが astrictius に、nerveuxが nervosius、esloigné d'affectationが minus comptum、plustost soldatesqueが magisque masculum に対応している。Cf. Hugo FRIEDRICH, *Montaigne*, traduit de l'allemand par Robert Rovini, Paris, Gallimard, 1968, p. 421, n. 323.

要性を持っているが、それらは他の著作と組み合わせることで、一層効力を発揮するからである。たとえば、『ラテン語語用論』*De copia duplici rerum ac verborum* は、あるラテン文の表現をさまざまに変奏する実例を示し、記述内容を豊かにすることが目指されているが、これを『格言集』や『警句集』、『類例集』*Parabola* などの古代の格言や逸話、決まり文句などを集め、注釈をほどこした著作と組み合わせることで、これらを読む者は、多くの模範的なラテン文を目にし、真似することで、自身のラテン語の表現能力をより豊かにできるとされている。

そして、一つの著作のみならず、多くの著作に着目することで、エラスムスが継続して考え、練り上げた思想に接近することができるというのも、こうしたアプローチを試みる理由である。たとえば、『キケロ主義者』は「キケロ主義論争」という特定の時期の出来事の影響下で書かれたものであり、同様に、宗教改革などの時代の趨勢やエラスムスの個人的な親交から書かれた著作もある。こうした個別性について考察するのも、もちろん必要なことだが、本論文においては、モンテーニュとの関係が主眼に置かれるため、エラスムスの思想に通底しているものを把握することのほうが、より重要である。したがって、本論文の課題は、エラスムスとモンテーニュについて、単に著作ごとの影響関係を探ることではなく、より深いところでの連関を考察することである。具体的には、『エッセー』における一つの常套表現が、何に由来するのか、他の作家、詩人による解釈はどのようなものかを確認する。次いで、エラスムスにおける同じ常套表現の引用と解釈を考察し、モンテーニュにおけるそれらと比較する。最後には、両者の考え方の独自性を、解釈の違いから明確にしていく。

## 2. 「蜜蜂が花々を飛び回るように」

先に触れたように、本論文の課題を達成するにあたり、ある一つの常套表現に注目する。常套表現とは、ある特定の時代、環境において広く共有された言語表現であり、それをを用いることで、ひとは言論において共通のイメージや話題、解釈などを喚起することができた。常套表現の歴史や機能についてここでは詳述しないが、それが人々の知識や思想の基盤として役立っているという点から、エラスムスとモンテーニュの関係性を明らかにする手がかりとして活用したいと思う。

### 2.1. 典拠

問題となる常套表現は『エッセー』第一巻 26 章「子供の教育について」のなかにある。この章は、モンテーニュが懇意にしていたド・フォア家のギュルソン伯爵夫人ディアヌに捧げるかたちで書かれた、教育論的側面を帯びたものである。ここでは、モンテーニュ自身が幼少期に受けた教育も仔細に語られながら、当時の教育や教師の硬直性、権威主義や銜学趣味に対する非難が述べられ、反対に、精神的に柔軟かつ好奇心旺盛な生き方が推奨される。そのなかで、アリストテレスやストア派、エピクロス派の哲学も、単なる権威と信用から教え込まれるべきではなく、生徒が選びながら、それらの思想を自分のものとしなくてはならないと述べられる。ここで常套表現が用いられる。

Les abeilles pillotent deçà delà les fleurs, mais elles en font après le miel, qui est tout leur ; ce n'est plus thin ny marjolaine : ainsi pieces empruntées d'autrui, il(=disciple) les transformera et confondra, pour en faire un ouvrage tout sien (...). (p. 152a)

蜜蜂はあちらこちらで花々を涉猟し、そのあとに蜜を作ります。この蜜はすべて彼らのものであって、もはや、タイムでもマヨラナ草でもありません。そのように、彼(生徒)も他人からの借り物を、変形させ、混ぜ合わせて、まったく自分自身の作品を作りあげるのです。

(14) 久保田剛史「『キケロ派』から『エッセー』へ——モンテーニュの文体論——」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』(12)、2003年、21-37頁。特に36頁、註16のなかでモンテーニュが所有していたエラスムスの『対話集』*Colloquia*に合本として『キケロ主義者』が付属していたことを文献学的に示している。また、「キケロ主義論争」については榎本武文「ルネサンスにおけるキケロ主義論争」、『一橋大学研究年報 人文学研究』(36)、1999年、269-333頁；*Ciceronian Controversies*, ed. JoAnn DellaNeva, Harvard U. P., 2007などが参考になる。



モンテーニュは哲学の思想や知識の学習方法を、蜜蜂が花々を飛び回り、蜜を作りあげることには喩えている。この蜜蜂の喩えこそが古代以来の有名な常套表現なのである<sup>(15)</sup>。

この表現の出典について『エッセー』の主要なエディションは以下のように文献を挙げている。

もっともよく使用されている Villey-Saulnier 版では、この蜜蜂のイメージは、セネカ『書簡』LXXXIV、プルタルコス『モラリア』の「講義を聴くことについて」やホラティウス『オード』IV, II、カスティリオーネ『宮廷人』I, XXV、そして16世紀の数多くの作家たちにある、としている<sup>(16)</sup>。

次に、Albert Thibaudet と Maurice Rat によるプレイアード版全集によれば蜜蜂のイメージはプラトンの「イオン」に由来し、ほかのところでは、ホラティウス『オード』IV, II、セネカ『書簡』XIIに見られるとしている。また、ロンサルがプロテスタントの牧師たちに対して答える詩にもこのイメージがあるとして引用している<sup>(17)</sup>。

そして、『エッセー』1595年版を底本とした Livre de Poche 版では、この蜜蜂のイメージが多くの文学作品のなかで、時代を超えて使われてきたことを示唆しつつ、プラトンの「イオン」534bにさかのぼることを示している<sup>(18)</sup>。

最後に、同じく1595年版『エッセー』を底本とした、最新のプレイアード版では、直喩のかたちでの常套表現であるとし、プラトン「イオン」534bに由来し、プルタルコス『モラリア』の「魂の平静さについて」やホラティウス『オード』IV, II、同様にカスティリオーネ『宮廷人』I, XXVIに見られる、としている<sup>(19)</sup>。

こうした文献が挙げられているが、注意したいのは、これらすべてが必ずしもモンテーニュが直接参照した出典であるというわけではないことだ。むしろ、出典の文脈をよく読めば、モンテーニュが言いたいこととニュアンスが異なる場合もある。したがって、モンテーニュがこの蜜蜂の常套句をどこから仕入れたのか確認するために、上記の情報をより精査する必要があるだろう。出典を整理するにあたり、理由はのちほど説明することになるが、セネカを中心にして、セネカ以前／以後というふうに分けて考察していく。

## 2.2. セネカ以前：蜜蜂と詩作

上で示した出典のなかで、もっとも古いものはプラトン（前427 - 前347）の「イオン」である。詩的靈感と詩作の技術、知識を峻別することを主な争点としてもつこの対話篇において、蜜蜂の比喩は、まさしく詩人がインスピレーションを受けることに際して使われている。ソクラテスによれば、詩人たちは文芸の女神ムーサの庭や谷にある蜜の泉から、まるで蜜蜂のように、飛び回って（ὡσπερ αἱ μέλιτται, καὶ αὐτοὶ οὕτω πετόμενοι）、詩歌をつみとり、我々のもとに運んでくるのだという<sup>(20)</sup>。ここでの蜜蜂は詩句を運んでくるというイメージを体現している。しかし、「イオン」のこの箇所にもさらに遡ることができ、たとえばアリストパネス（前446頃 - 前385頃）「鳥」の748行から750行がある。やはりここでも蜜蜂は詩歌を運ぶものの比喩として使われているのが確認できる<sup>(21)</sup>。

(15) Cf. Jürgen von STACKELBERG, « Das Bienengleichnis : Ein Beitrag zur Geschichte der literarischen Imitatio », in *Romanische Forschungen* vol. 68, 1956, pp. 271-293; G. W. PIGMAN III, « Versions of Imitation in the Renaissance », in *Renaissance Quarterly* vol. 33, n. 1, 1980, pp. 1-32.

(16) *Les Essais*, op. cit., p. 1224.

(17) *Œuvres complètes*, textes établis par Albert Thibaudet et Maurice Rat, 1 vol., « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 1962, « Notes et variantes », p. 1467, n. 5.

(18) *Les Essais*, édition réalisée par Denis Bjaï, Bénédicte Boudou, Jean Céard et Isabelle Pantin, sous la direction de Jean Céard, 3 vol., Le Livre de Poche, « Classiques », 2002, p. 270, n. 4.

(19) *Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, 1 vol., « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2007, « Notes et variantes », p. 1397.

(20) PLATO, *Ion*, dans *Platonis Opera*, ed. John Burnet, Oxford University Press, 1903, 534b.

(21) ARISTOPHANES, *Birds*, dans *Aristophanes Comoediae*, ed. F.W. Hall and W.M. Geldart, vol. 2. F.W. Hall and W.M. Geldart, Oxford Clarendon Press, Oxford, 1907, v.748-750, « ἐνθεν ὡστερεὶ μέλιττα / Φρύνιχος ἀμβροσίων μελέων ἀπεβόσκειο καρπὸν αἰεὶ / φέρων γλυκεῖαν ᾠδάν » 「ここからプリュニコスは蜜蜂のように / アンブロシアー風の歌の果実を食べてはいつも / 甘い詩歌を運んでいった」。

プラトンやアリストパネスと同様のイメージで蜜蜂を用いているのは、もっとも頻繁に出典として挙げられているホラティウス（前65 - 前8）であろう。『オード』第四巻は、アウグストゥスの凱旋を祝うように請われたホラティウスが、アウグストゥスの義理の甥であるユリウス・アントニウスに詩作を勧めるという形で書いたものであり、蜜蜂の比喩が出てくるのは、ホラティウスがみずからの乏しい才能と、ギリシャの詩人ピンダロスの天の高みにあるような詩作を比較する箇所である。

multa Dircaeum leuat aura cycnum,  
tendit, Antoni, quotiens in altos  
nubium tractus : ego apis Matinae  
more modoque,

grata carpentis thyma per laborem  
plurimum, circa nemus uuidique  
Tiburis ripas operosa parvus  
carmina fingo<sup>(22)</sup>.

激しい風がディルケの白鳥を高みに揚げ、  
雲のあたりに近づくこともある。  
アントニウスよ、私はマティヌス山の  
蜜蜂の習慣とやり方にしたがって、

魅惑的なタイムの蜜を多くの労苦によって集め、  
森や潤いのあるティブルの岸辺に、  
慎ましい仕方では詩歌をつくりだしているのだ。

ホラティウスは、天に昇るような「ディルケの白鳥＝ピンダロス」と、ティブル（現ティヴォリ）の岸辺で苦勞しながら歌を作りだしている自分を比較し、謙遜を示しているわけだが、ここで蜜蜂の比喩を用いることで、詩作の労苦と蜜蜂が蜜を集めることを重ねあわせて表現している。

以上の例をまとめるならば、蜜蜂の比喩は、詩人が詩作する際、もしくは詩想の源泉を見出す際に、詩人自身と重ねあわされて利用されるイメージであり、みずからの詩作の労苦や、詩歌や言葉を取り出す作業を、蜜蜂が花々のあいだを飛び回って蜜を集めることにたとえているのである。

### 2.3. セネカ以後：収集と消化

この蜜蜂にかんする比喩が常套句として広まるのに最も重要な役割を果たしたのがセネカ（後1頃 - 65）である。彼は『書簡』LXXXIVにおいて様々な思想を集めることについて以下のように語っている。

Apes, ut aiunt, debemus imitari, quae vagantur et flores ad mel faciendum idoneos carpunt, deinde quicquid attulere, disponunt ac per favos digerunt (...). nos quoque has apes debemus imitari et quaecumque ex diversa lectione congressimus, separare, melius enim distincta servantur, deinde adhibita ingenii nostri cura et facultate in unum saporem varia illa libamenta confundere, ut etiam si apparuerit, unde sumptum sit, aliud tamen esse

<sup>(22)</sup> HORACE, *Odes, Book IV and Carmen Saeculare*, edited by Richard F. Thomas, Cambridge U.P., 2011. また、ルクレティウス（前99頃 - 前55）は『事物の本性について』第三巻の冒頭で蜜蜂を登場させている。ここでは、エピクロス黄金の言葉を、蜜蜂が甘い蜜を吸るように、その書物からむさぼり取ろうというルクレティウスのエピクロスに対する称賛が表明されている。詩歌を集めることの比喩ではないにせよ、言葉を集め、吸い取る比喩として蜜蜂が喚起されている。

quam unde sumptum est, appareat<sup>(23)</sup>.

人がよく言うように、われわれは蜜蜂を真似しなくてはなりません。それはあちこち飛び回り、蜜を作るのに適した花を吸い取ります。それから、運んできた蜜をいくつかに分け、巣穴ごとに配分します。(中略) われわれもまたこのような蜜蜂を真似しなくてはなりません。そして様々な読書から集めたものはなんであれ分けておかなくてはなりません。というのも、分けておいたほうが保存するのによいからです。それからわれわれの天性の注意力と才能を適用して、あの様々な味を混ぜ合わせて一つの風味にし、たとえそれがどこから取られたのかわかって、それとは別のものだとわかるようにするべきです。

読書によって様々な知識や思想を集め、分類し、みずからの才能と合わせることで、もとの書物の知識や思想そのままではなく、別のものに変容させることが説かれ、その知識、思想の収集、それらの分類と消化が蜜蜂の比喩を使って述べられているのが確認できる。セネカのこの「収集」と「消化」という価値づけが、蜜蜂の比喩を一つの常套表現へと転換させたのである。つまり、いままでは詩作という限定した行為において使用されていた、花々のあいだを飛び回り蜜を集める蜜蜂というイメージが、セネカ以後、読書による知識の収集と消化という、より広く見受けられる行為の常套表現として用いられるようになったのだ。

そうした使用例をいくつか挙げるならば、5世紀はじめにマクロビウスは、『サトゥルナリア』序文のなかで、セネカの文をほとんどそのまま引き写している。そして、読書の知識が消化され別のものになるだけでなく、食物の消化や合唱の声の一体化など、似たような現象は自然のなかに見つけられるとして、自分の著作の主題が多くの読書から集められたものであり、自分なりに語りなおしたものであるという主張の理由を補強している<sup>(24)</sup>。また、時系列が前後するが、4世紀のギリシャ教父カイサリアのバシレイオスも、蜜蜂の常套表現を読書について論じるところで用いている。彼が晩年、若者にむけて書いた『若者たちに』のなかで、いかにしてキリスト教徒は世俗の文学作品、特にギリシャの文学を自分たちの信仰に役立たせたらよいか助言を与えている。蜜蜂以外のものは花々から香りや色の享樂を得るが、蜜蜂は自分の役に立つ蜜を集める。それと同様に、キリスト教徒たるもの、快さではなく有益さを読書から引き出すべきであり、有害になりそうなものは避けるべきだ、と説かれている<sup>(25)</sup>。

ルネサンス期に入ってからはいえ、イタリアでカスティリオーネは『宮廷人』のなかで、宮廷人を目指す者は、蜜蜂が花々を集めに行くように、優雅な人物の実例をいくつも観察し、それぞれの優雅さを盗み、自分のものを作り出すことが必要である、と言っている<sup>(26)</sup>。そしてフランスでロンサルは、ヘラクレスの愛する青年イラスが、その美しさゆえにニンフたちに誘惑され、池に引き込まれてしまうという神話をテーマに歌っている。この詩のなかで、ロンサルはヒュラスの消失とヘラクレスの悲しみについて、蜜蜂が緑や黄色といった花々から好きなように生命力である蜜を集めるように、多くの本から最も美しい描写を選別して、一つの絵を描いたのだと言っている<sup>(27)</sup>。

最後に、モンテーニュにとってはセネカに次いで重要なプルタルコスについても検討しておこう。Villey-Saulnier 版で出典として挙げられている「講義を聴くことについて」では、講義を聴く者は、話者の言論のうち自分の長所や欠点を見出すことが必要であるので、言葉のうわべにだまされてはならない、という話のなかで蜜蜂の比喩が持ち出される。弁論を行なう者のなかでもソフィストと呼ばれる人々は、声の抑揚や調子などで聴く者に快樂を与えるが、これは実質的には何の役にも立たない。だから講義を聴く際は、蜜蜂のように

<sup>(23)</sup> SENECA, *Ad Lucilium Epistulae Morales*, ed. Richard M. Gummere, Loeb Classical Library, 1917-1925, Letter 84, sec. 3 and 5. またクインティリアヌスも、蜜蜂の比喩を用いてはにせよ、読書における知識の消化について語っている。Cf. QUINTILIAN, *Institutio Oratoria*, Book 10, ed. Harold Edgeworth Butler, Loeb Classical Library, 1922, chap. 1, sec. 19.

<sup>(24)</sup> *Saturnalia*, ed. Robert A. Kaster, Loeb classical library, 2011, « Preface », sec. 5-6.

<sup>(25)</sup> SAINT BASILE, *Aux jeunes gens*, texte établi et traduit par L'abbé Fernand Boulenger, Les Belles Lettres, 1965, IV, pp. 45-46.

<sup>(26)</sup> CASTIGLIONE, *Le livre du courtisan*, présenté et traduit de l'italien d'après la version de Gabriel Chappuis (1580) par Alain Pons, GF-Flammarion, 1991, XXVI, pp. 53-54.

<sup>(27)</sup> RONSARD, « Hylas », dans *Œuvres complètes*, éd. Jean Céard (...), Gallimard, 1993, 413-417.

スマイルやバラ、ヒヤシンスといった香りの良い（快樂を与えてくれる）ものではなく、刺激のあるタイムのほうに降りて、有用な蜜を得るべきなのだ、と語られている<sup>(28)</sup>。また、最新のプレイアード版で言及されている「心の平静さについて」でも、思慮が生を善くも、快くもすることが語られ、心の平静さを得るためには、外界との接触を断ち、無為でいることではなく、むしろ外界のことを自分に適合させることが重要なのだと言われている。その際に、思慮ある人が困難な状況からでも自分に役立つものを見つけることの比喩として蜜蜂が持ち出されている<sup>(29)</sup>。こうしたプルタルコスにおける蜜蜂のイメージの使用例は、快樂よりも有用さを求める蜜蜂の賢さに重点が置かれており、モンテーニュの使用例とは少し文脈が異なる。

以上の実例からもわかるように、セネカ以後、知識と思想の収集と消化にかんして蜜蜂の比喩が常套表現として定着した。モンテーニュも他の作家たち同様、セネカの見解を受け継いで、知識の収集と消化について語る際に、この表現を用いていることが明らかである。

### 3. エラスムスとモンテーニュの見解

古典の継承者たるエラスムスにとって蜜蜂の常套表現は、彼の著作のあちらこちらで使われているという事実が示すように、慣れ親しんだものである。もちろんそこでの意味は、セネカ以後の作家たち同様、読書における知識、思想の収集と、それらを見ずからの天性と混ぜ合わせ、消化するというものである。以下に示していくように、エラスムスはこの常套表現を少しアレンジを加えながら様々に活用しているのが見て取れる。したがって、ここからはこの常套表現を大まかな意味である「収集」と「消化」に分けて、それぞれがエラスムスの著作のなかでどのような様相を示すか詳しく見ていく。そして最後には、モンテーニュがこの常套表現のうえに加えた自身の考えと比較し、両者の思想を検討していく。

#### 3.1. エラスムスと「収集」

セネカは、知識の収集と消化という一連のプロセスを蜜蜂の常套表現で語っているが、エラスムスは、収集と消化を切り離し、それぞれを著作の文脈に沿って活用させている。ここで見るのは、蜜蜂の「収集」に限定したイメージである。

1503年2月13日、ルーヴァンでカンブレの代理総司教 Jacob Anthoniszoon 宛てに出された手紙のなかで、エラスムスは全体としてこの代理総司教を称賛する調子なのだが、とりわけ、この人の学識の深さを褒め上げる際に、蜜蜂のイメージが登場する。教会法や神学に通じているのみならず、歴史や古代や現代の文学といったあらゆる種類の知識に精通していることが、あちこち飛び回る蜜蜂と重ねあわされている<sup>(30)</sup>。

また1506年、不惑の年を前にして、イタリアへ向けてアルプスを越えている際につくったラテン詩「*De senectutis incommodis*」では、人生の短さと人間が達成しうる業績のむなしさを嘆き、知恵のはじまりとして老年と死の思索にふけるという、古代以来の修辞学的トポスに沿って、これまでの年月を振り返っている。ここでエラスムスは、学者あるいは作家としてあらゆる種類の作家たちの才能を苦労しながら見て回るみずからの姿を、蜜蜂に喩えている<sup>(31)</sup>。

ところで、「あらゆる種類の」というときエラスムスが考えているのは、古代と現代の学識のみならず、聖なる学と世俗のものも含まれる。特にそれは、1516年の聖ヒエロニムス全集の序文として掲載した William Warham 宛ての手紙によく示されている<sup>(32)</sup>。ヒエロニムスはヘブライ語やギリシャ語をはじめとして、新旧や聖俗の分け隔てない学識を自分の作品を作り上げるために身に着けたとして称賛されている。これが、エラスムスにとっての「収集」の意義であり理想である。聖俗分け隔てなく学ぶことは、アウグスティヌス<sup>(33)</sup>や前述

(28) PLUTARQUE, « Comment écouter », dans *Œuvres Morales*, t. I, 2<sup>e</sup> partie, Les Belles Lettres, 1989, 41F.

(29) *Id.*, « De la tranquillité de l'âme », t. VII, 1<sup>ère</sup> partie, 1975, 467C

(30) Allen, II, n° 173, p. 383.

(31) CWE, 85, p. 18, 96-104.

(32) Allen, II, n° 396, pp. 216-217.

(33) Cf. *La doctrine chrétienne*, dans *Œuvres de Saint Augustin 11-2*, Institut d'Études Augustiniennes, 1997, Liber II, XL,60 ; XLII, 63.



のバシレイオスなどの教父たちの思想を受け継いだものであるが、古典文化の再生というルネサンスの特徴をも含んだものと見ることができるだろう。

### 3.2. エラスムスと「消化」

エラスムスが知識の「消化」について述べるのは、主に文章作成に関係するときである。たとえば『ラテン語語用論』においては、話題の構成について扱う箇所、蜜蜂が飛びまわるように熱心にさまざまな書物を渉猟し、それらはあまりに豊かな内容を持っているので、そのなかから選び、みずからの論述の構成に適合させることが説かれている<sup>34</sup>。また、『キケロ主義者』ではラテン語を書く際に、たった一人の著者、つまりキケロの文体だけを模倣するのではなく、あらゆる著者たちから、たとえ最もかけ離れたものであっても文体を借りてきて、蜜蜂がやるように、みずからの要素と混ぜ合わせ、元の風味がわからないようにすることが語られている。

Apes num ex vno frutice colligunt mellificii materiam? An potius ad omnes florum, herbarum, fruticum species mira sedulitate circumuolant, frequenter e longinquo petentes quod condant in aluearia? Nec statim mel est quod adferunt, fingunt ore visceribusque suis liquorem, ac in ipsas transformatum rursus ex sese gignunt, in quo non agnoscas, nec floris, nec fruticis delibati saporem, odoremue, sed apiculae foetum ex omnibus illis temperatum<sup>35</sup>.

蜜蜂はたった一つの花から蜜を作るための物質を集めるのだろうか。いやそうではなく、むしろあらゆる草花や藪のようなものに、驚くべき熱心さで飛び回り、しばしば遠くまで探しに行き、自分の巣に蓄えるのではないか。ところで、運んできたものがすぐさま蜜になるわけではなく、蜜蜂は自分の口内で（物質を）溶かし、自分自身の物質と混ぜ合わせたものをつくりだすのだ。そこでは、どの花や藪から取った風味や香りか見分けはつかず、すべての物質から作り出され、よく整えられた蜜蜂自身の産物となっているのである。

こうしたエラスムスの「消化」にかんする見解は、蜜蜂のように色々な花から蜜を集めて回り、そののち、借りてきたものである花の蜜を自分の天性と混ぜ合わせ、元のものとは別物の、自分自身の蜜にするという点で、セネカの考え方を受け継いでいる。

### 3.3. モンテーニュと「判断」

セネカによって「収集」と「消化」という価値づけがされた蜜蜂の常套表現は、エラスムスの著作群においては、ジャンルや種類の別なく学識を身に着けること、言い換えれば、人文主義的教養の「収集」と、よそから集めたものを自分の才能や性質と混ぜ合わせる「消化」というように、それぞれ使用されているのを確認した。

ところで、モンテーニュに立ち返れば、彼はセネカの教えにしたがい、書物の知識を混ぜ合わせて、形を変え、自分自身の作品を作るように言う。ここまでは、単なる知識の消化ではなく、そこから自分独自のものを生み出すという点でエラスムスと見解を同じくしているのが確認できる。しかしながら、続く部分でモンテーニュは非常に重要なことを述べている。自分自身の作品とは、「判断 judgement」である。そして、教育も勉学

<sup>34</sup> ASD, I-6, p. 262, 613-617, « Itaque studiosus ille velut apicura diligens per omnes autorum hortos volitabit, flosculis omnibus adsultabit, vndique succi nonnihil colligens quod in suum deferat aluearium. Et quoniam tanta est in his rerum foecunditas vt omnia decerpi non possint, certe praecipua deliget et ad operis sui structuram accommodabit » 「したがって、学ぶ者は蜜蜂のように、熱心に著者たちの庭すべてを飛び回り、あらゆる花に止まって、いたるところで蜜を集め、自分の巣に持ち帰るのです。その思想はすべて集めることができないほどの豊かさなので、その中で特に重要なものを選び、自分の作品の文章構成に一致させるのです」。

<sup>35</sup> ASD, I-2, p. 652, 13-19.

も研究も、ただこの「判断」を形成するのが目的である<sup>36)</sup>、と。よく知られているように、『エッセー』第一巻50章の冒頭では「判断」の「試験 *essais*」を行なっているのだと言明され<sup>37)</sup>、『エッセー』という作品はモンテーニュがあらゆる事柄に対して判断を行使したその過程と結果を示しているのだということがわかる。また、第三巻12章「顔つきについて」のなかでは、「私は多くの借り物のなかから、どれか一つを盗み、変装させ、新しい役に立てることができたらうれしい」<sup>38)</sup>と述べ、借り物になにか意味を与えて、単なる借り物でないように見せることに積極性を与えている。このようにモンテーニュにとっては、すでに存在する価値に対して、それをそのまま受け入れるのではなく、自分なりの「判断」を加えることで、元の文脈とは異なる新しいものを生み出すことが重視されていることが見て取れる。

同じ常套表現を使用するエラスムスとモンテーニュを比較したときに明らかなのは、エラスムスはこの表現を、あくまでセネカ以来続いてきた解釈のなかで利用しているが、他方のモンテーニュは、その解釈のうえに独自の考えを接ぎ木したことである。このことこそまさしく、知識を消化することにとどまるのではなく、そこから「判断」を導き出すというモンテーニュの思想を十全にあらわしていると言えるだろう。

## おわりに

本稿は、エラスムスとモンテーニュの関係性を、蜜蜂の常套表現を手がかりにして明確にすることであった。モンテーニュがエラスムスの著作を読んだ、あるいは読んでいないとか、どのような影響があるかといったことを探るのではなく、同じ表現を前にして、両者がどのような反応を示したかを考察し、両者の考え方の親和性と差異を明確にすることができた。蜜蜂の常套表現の典拠や解釈の伝達について概観した結果、セネカ以後「収集」と「消化」という価値づけによって定式化し、そのなかでエラスムスはキリスト教教父たちの思想に影響を受けつつ、「収集」を人文主義的教養を身に着けることとして位置づけた。また他方でラテン語の学習において文体や構成の「消化」を重視していることも明らかになった。これまでなされてきた解釈の枠内に収まっているエラスムスに対して、モンテーニュは、セネカ以後の解釈を受け入れつつもそこに独自の考えを付け加えている。この行為こそまさしくモンテーニュが蜜蜂の常套表現に対して行なった彼自身の「判断」であり、博識のイメージが定着しているエラスムスの名を一度しか言及しなかったのも、こうした「判断」の一つだと言えるだろう。

<sup>36)</sup> *Les Essais*, éd. P. Villey et V.-L. Saulnier, I, 26, 152a.

<sup>37)</sup> *Ibid.*, I, 50, 301a.

<sup>38)</sup> *Ibid.*, III, 12, 1056c, « Parmy tant d'emprunts je suis bien aise d'en pouvoir desrober quelqu'un, le desguisant et difformant à nouveau service ».